

◆大道晴香『「イタコ」の誕生』弘文堂

「イタコの口寄せ」が全国区になったのはなぜか？そして、その変化は現場に何をもたらしたのか？本書には、その答えがある。(今井秀和)

◆横山泰子『江戸歌舞伎の怪談と化け物』講談社選書メチエ

江戸歌舞伎の怪談物に焦点をあて、妖狐・化け猫・幽霊(お岩など)、さらには宙乗り・水中早替りなどの仕掛けについて、比較文化論的見解を交えつつ言及する魅力的な内容です。(笹生美貴子)

◆東雅夫『江戸東京怪談文学散歩』角川選書

具体的な地名と結びついた怪談の舞台を訪れる水先案内人として最適な一冊。虚構と現実が交錯するもうひとつの東京の姿がそこに。(市川寛也)

◆堤邦彦『江戸の怪異譚』ペリかん社

唱導・仏教説話との関連などから、時代やジャンルを超えた文献を博搜しつつ、近世(江戸時代)の怪異文芸の特質に迫る研究書。(佐伯孝弘)

◆氏家幹人『江戸の怪奇譚』講談社文庫

神隠し・河童・奇病・猫娘・嫉妬・イジメ・凶宅などの内容別に、江戸時代の随筆・記録類から怪談を抽出。読みやすい現代語訳で紹介。(佐伯孝弘)

◆香川雅信『江戸の妖怪革命』角川ソフィア文庫

18世紀、妖怪は「伝承」から「表象」の存在へと変質した。近世から近代に及ぶ妖怪観の変遷を多彩な新資料によってあとづけた「妖怪アルケオロジー」の試み。(近藤瑞木)

◆吉田司雄『オカルトの惑星』青弓社

1980年代、浮かれた時代のオカルトとは？やがて精神世界ブームへも繋がっていく、当時の「隠された知」に光を当てた刺激的な論集。(構大樹)

◆「ゴーストハント」編集委員会『小野不由美「ゴーストハント」読本』メディアファクトリー

小野『ゴーストハント』を様々な角度から検証。そのアプローチからは、はからずも戦後日本におけるオカルトの受容史が浮かび上がる。(一柳廣孝)

◆荒俣宏『お化けの愛し方』ポプラ社

古今の文化的背景を交えながら、生死を超えた愛を描く怪談の魅力を興味深く解説。読後はお化けを愛したくなる著者渾身の労作。(馬見塚昭久)

◆光原百合『おのみち怪談』本分社

猫と階段が多い街、尾道には怪談が似合う。土地の記憶が育んだ「ふるさと怪談」と、新たに紡がれた「てのひら怪談」の二部構成。(乾英治郎)

◆荒俣宏『怪』カドカワムック

妖怪をこよなく愛する文化人が集結し語らう、世界唯一の専門マガジン。古今東西の妖怪たちが、ノスタルジーを刺激する。(岡田康介)

◆東アジア怪異学会『怪異学入門』岩田書院

東アジア怪異学会設立十周年の節目として、これまでの研究成果の蓄積を判りやすく解説した理想的な入門書。(江坂正太)

◆東アジア怪異学会『怪異学の可能性』角川グループパブリッシング

「怪異」という事象を国家統治の重要なシステムとし、その認識・説明体系のありようを古代から近代までを見据えて検討した論集。(江坂正太)

◆東アジア怪異学会『怪異学の技法』臨川書店

これまで歴史学研究の検討からはずされてきた「怪異」という事象にまともに光を当てた一書であり、東アジア怪異学会の記念碑的論集(江坂正太)

◆一柳廣孝/茂木謙之介『怪異とは誰か』青弓社

怪異の向こう側を見通そうとする視線に貫かれた意欲的な論集。その先には国家・社会の欲望が、そして「私」たち自身がいた…！（構大樹）

◆高谷知佳『「怪異」の政治社会学』講談社選書メチエ

「怪異」は、権力と深く関わり、政治利用される事もありました。本書は、多くの怪異の飛び交った室町時代に焦点をあて、分析した一冊です。（笹生美貴子）

◆佐々木高弘『怪異の風景学』古今書院

すごーい！「クビナシウマ」ちゃんは、しこくちほーに伝わるだけもののフレンズなんだね！ 廃墟も映画も伝説の調査もたーのしー！（永島大輝）

◆一柳廣孝/今井秀和/大道晴香『怪異を歩く』青弓社

人が移動し新たな空間に出会うとき、そこに立ち上がる怪異とは？怪談、イタコ、幽霊タクシー……怪異を「歩」き味わう一冊。（富永真樹）

◆喜多崎親『怪異を語る』三元社

京極夏彦はじめ5人の論客が、〈怪異〉表現の過去・現在・未来を縦横無尽に語り尽くす！ 伝説のシンポジウムが今ここに甦る！（乾英治郎）

◆東アジア怪異学会『怪異を媒介するもの』勉誠出版

不思議なモノゴトは人々の間に広まることで怪異となる。「媒介」をキーワードに、古今の怪異の成立をひも解いた貴重な論集。（構大樹）

◆一柳廣孝/飯倉義之『怪異を魅せる』青弓社

何を語り、いかに描けば、怪異は「怪異譚」になるのか？古典からサブカルチャーまで「魅せる怪異譚」を生む表現方法に迫る一冊。（鈴木彩）

◆谷口基『怪談異譚』水声社

怪談が孕む「怨念」が、近代日本の実相を照らし出す！ 〈近代〉と斬り結び〈現代〉を問うアクチュアルな場として怪談を論じた名著！（副田賢二）

◆大塚英志『怪談前後』角川選書

明治40年代の「怪談の時代」にあって、柳田国男を取り巻く文学共同体の文脈から『遠野物語』と自然主義の関係性に切り込む。（一柳廣孝）

◆東雅夫『怪談文芸ハンドブック』メディアファクトリー

ホラーよりも怪談を嗜好する君、これを読め！日本ホラー小説大賞よりも『幽』怪談文学賞を志向する君、これを読め！ ヒガシとともに、グローバル化の幻影を打破せよ！（谷口基）

◆小泉凡『怪談四代記』講談社文庫

ご存じ『KWAIDAN』の著者、小泉八雲の曾孫が綴る家族エッセイ。人と人とのつながりが生み出す怪談・奇談がテンポよく紡がれる。（市川寛也）

◆日本民話の会学校の怪談編集委員会『学校の怪談大事典』ポプラ社

誰もが知っている「学校の怪談」が事典になって大集合！ 口承文芸学などの学問的成果を添えながら解説する「学校の怪談」案内書。（上島真弓子）

◆伊藤慎吾『擬人化と異類合戦の文芸史』三弥井書店

獣も鳥も、台所道具すらもが甲冑に身を固めて戦に臨む。擬人化キャラ同士のバトル物は、すでに前近代において隆盛していた！（今井秀和）

◆清水潤著/怪異怪談研究会編『鏡花と妖怪』青弓社

泉鏡花から岡本綺堂、水木しげるまで、妖怪や幽霊を切り口として、近現代日本の幻想と怪異を縦横無尽に論じ尽す。（一柳廣孝）

◆平山夢明『恐怖の構造』幻冬舎新書

稀代のホラー作家・平山夢明が様々な事例を挙げながら豊富な知識と圧巻の説得力で語りかけ恐怖を追究する、恐怖探究者必見の書！（上島真弓子）

◆小中千昭『恐怖の作法』河出書房新社

「ホラー映画の創始者が明かす「恐怖を生み出すメカニズム」―一通称「小中理論」とは？ 本書を読まずして貞子や伽椰子は語れない！（乾英治郎）

◆吉田悠軌『禁足地帯の歩き方』学研プラス

国内外を射程に民間伝承・都市伝説・スピリチュアルなどレベルを異にした怪奇スポット探訪が記録。「オカルト探偵」の面目躍如。（茂木謙之介）

◆東雅夫/下楠昌哉『幻想と怪奇の英文学』春風社

英語の授業は忘れよう。いつだって英文学は幻想と怪奇という悩ましい隣人に育まれてきた。芥川などの補助線にもなるお得な論文集。（橋本順光）

◆東雅夫/下楠昌哉『幻想と怪奇の英文学 2』春風社

動物関係が特に充実した、英米文学者の真面目で深い幻想・怪奇研究。最後の執筆者のお勧めは必見。（中川千帆）

◆伊藤龍平/謝佳静『現代台湾鬼譚』青弓社

幽霊と鬼、霊視と陰陽眼、こっくりさんと碟仙など、日本と台湾の現代伝承の共通点と相違点を「学校の怪談」を起点に探究する一冊。（上島真弓子）

◆石井正己編『現代に生きる妖怪たち』三弥井書店

第37回山桃忌の講演・シンポジウムの記録と多角的な論考・コラムを取めた本書はまさに「現代妖怪」への示唆に富んだ導きの書！（上島真弓子）

◆榎村寛之『古代の都と神々』吉川弘文館

政治と神と神社が不可分の関係にあったことを、史書や説話などのエピソードから多角的に紹介している書。（早川芳枝）

◆沖田瑞穂『怖い女』原書房

都市伝説や怪談などに登場する「怖い女たち」と神話に登場する恐ろしい女神たちの考察を通して時代を超えた女の怖さを論じる書。（早川芳枝）

◆湯本豪一『今昔妖怪大鑑』パイインターナショナル

「湯本半端ないって！怪しいのまじめっちょコレクションするもん……博物館できひんやん普通、そんなんでできる？言っといてや。」（永島大輝）

◆高田衛/佐伯孝弘『西鶴と浮世草子研究 2 特集 怪異』笠間書院

鼎談・江戸の怪異譚と西鶴、企画・江戸の怪異スポットなど。『怪異物挿絵大全』、『武太夫物語絵巻』等を取める付録CDも充実。（近藤瑞木）

◆横山泰子/飯倉義之『皿屋敷』白澤社

十枚目の皿はどこへ行ったのか？ あえてまじめに探してみたら、未翻刻の『播州皿屋鋪細記』が出てきたという驚きの結果に！（広坂朋信）

◆田中康弘『山怪』山と溪谷社

マタギ達は知っている。山には得体の知れない何か居ることを……。出版界に〈山怪〉ブームを巻き起こした現代版『遠野物語』！（乾英治郎）

◆池上良正『死者の救済史』角川選書

「恨み苦しむ死者」を「安らかな死者」へと変える技術と作法。「供養」と「憑依」をキーワードに、日本の民衆宗教史を描く一冊。（大道晴香）

◆広坂朋信/横山泰子『実録四谷怪談』白澤社

怪談好きとしてどうしても読みたかった一冊。自分で現代語訳を手がけることができたのも、お岩さまのお導き。怪談芝居の女王に深く感謝。（広坂朋信）

◆小二田誠二『死霊解脱物語聞書』白澤社

松浦だるま『累』（講談社）をインスパイアした江戸時代の憑霊事件ドキュメント。たぶん9割方は史実（あくまでも私見です）。（広坂朋信）

◆小松和彦『進化する妖怪文化研究』せりか書房

妖怪へのアプローチ、その現在地。伝承・比較・図像・マンガ等々、妖怪を語る言葉はいとも尽きない。さらに前に進むためのナビとして。（小林敦）

◆志賀市子『中国のこっくりさん』大修館書店

人は、いつどのようにして神と交信するのか。中華圏の人々のメンタリティを知るよすがになる一冊（伊藤龍平）

◆伊藤龍平『ツチノコの民俗学』青弓社

ツチノコは未確認動物か、妖怪か。見たことのないツチノコをなぜ私たちは知っているのか。伝承を調べる面白さに溢れた一冊。（山川志典）

◆川村邦光『吊いの文化史』中公新書

日本人は死者といかに向き合い、弔ってきたのか。豊富な文献資料と民俗調査の成果をもとに、「鎮魂の形」を跡付けた傑作。（大道晴香）

◆東雅夫『遠野物語と怪談の時代』角川選書

怪異と奇想を連帯の合言葉とした明治の文人たちの交遊が、日本近代文学史を鮮やかに相対化する。日本推理作家協会賞受賞の力作評論、心して読め！（谷口基）

◆宮田登『都市空間の怪異』角川選書

都市空間に溢れる怪異に切り込んだ民俗学者の遺稿集。都市空間を読むヒントが詰まっている。同著者の『妖怪の民俗学』もぜひ。（山川志典）

◆鈴木堅弘『とんでも春画』新潮社

化け物・幽霊・獣に神様仏様まで登場の異形のエロス。その奔放さと不思議なユーモアは、あなたの春画観をがらりと変えるはず！（飯倉義之）

◆伊藤龍平『何かが後をついてくる』青弓社

人はどのように妖怪を感じ、認識しているのだろうか。北海道から沖縄、さらには台湾の事例を元に、妖怪と身体感覚の関係に迫る。（今井秀和）

◆稲生平太郎『定本 何かが空を飛んでいる』国書刊行会

いつの時代も、人は空に光る「何か」を見ていた。UFO体験を論じた文化論。（伊藤龍平）

◆C.アウエハント『鯨絵』岩波文庫

「アウエハント先生」を「そ、そんなナマズ絵の人は知らない！」ではすまされぬ。構造主義の魁にして、民俗学の金字塔。図版多数。（永島大輝）

◆朝里樹『日本現代怪異事典』笠間書院

赤い靴の怪報告者・永島氏「本書は在野に生まれた在野の事典でございます。戦後過ぎてもお化けは、ようございますでございます」（永島大輝）

◆大森亮尚『日本の怨霊』平凡社

本書は天皇家に崇る怨霊の歴史を語る書。天皇家の人間でありながら、皇位継承争いで非業の死を遂げた人物を中心に紹介している。（早川芳枝）

◆清泉女子大学「日本文学と怪異」研究会『日韓怪異論』笠間書院

怪異研究を切り口として、日韓における死生観に着目し、比較文学・文化・文芸の視点を取り入れつつ考究したものです。日本編では「火車」説話、韓国編では「淑英娘子伝」をはじめとした論考が各5本ずつ、計10本掲載されています。（笹生美貴子）

◆小松和彦『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版

民間に伝承されていた怪異・妖怪を実際の事例とともに解説した事典です。メリーさんの電話のような現代の伝承も収録しています。(辻本慶樹)

◆M.フォスター『日本妖怪考』森話社

近世から現在までの妖怪言説を対象とした日本文化史。様々な二項対立から巧みに抜け出す妖怪たちが鮮やかに浮かび上がる。(茂木謙之介)

◆横山泰子／早川由美『猫の怪』白澤社

化け猫から招き猫まで、江戸時代の怪猫談のあれこれを8人がかりで追っかけまわしたバラエティ豊かな一冊。(広坂朋信)

◆伊藤龍平『ネットロア』青弓社

インターネット上で広がり伝わる不思議な出来事。電承説話(ネットロア)からは、「ハナシ」の伝承の新たな展開がみえてくる。(山川志典)

◆大島廣志『野村純一怪異伝承を読み解く』アーツアンドクラフツ

昔話研究の大家が綴る、怖くて楽しい変な話。著者の人となりを知るのにも最適な一冊。(伊藤龍平)

◆一柳廣孝／近藤瑞木『幕末明治百物語』国書刊行会

如法暗夜の明治の夜を妖しいまでに美しく染め上げた百物語怪談会。巨匠圓朝の至芸から異邦人ハーンの魂を震わせた猪怪談まで、須く堪能せよ！(谷口基)

◆江戸狂歌研究会『化物と楽しむ江戸狂歌』笠間書院

天明期江戸の狂歌師たちによる妖怪狂歌集『狂歌百鬼夜狂』の語釈、現代語訳、化け物解説をフル装備。稀少な妖怪図版も満載。

◆山田雄司『跋扈する怨霊』吉川弘文館

史書や説話、軍記物語に登場する怨霊を時代を追って紹介する怨霊の日本史ともいべき書。(早川芳枝)

◆徳田和夫編『東の妖怪・西のモンスター』勉誠出版

東西の「見えないもの」達の物語を対照すれば、精神文化の差異と普遍性が見えてくる！読者を〈比較妖怪学〉の世界に誘う論集。(乾英治郎)

◆近藤瑞木『百鬼繚乱』国書刊行会

江戸中期以降の黄表紙の怪談集や妖怪図集6作品(『百鬼夜講化(やこうばけ)物語』『模文画今(ももんがこん)怪談』『絵本小夜時雨(さよしぐれ)』など)の影印・翻刻及び解説。(佐伯孝弘)

◆川村邦光『憑依の近代とポリティクス』青弓社

近代社会という枠組みの中で、「憑依」は再解釈され、弾圧・排除の対象となった。近代日本の「憑依」をめぐる文化的抗争を描く。(大道晴香)

◆橋弘文／手塚恵子『文化を映す鏡を磨く』せりか書房

「異人論」「妖怪」「図像と象徴」「フィールドからの視座」の4つのテーマを柱とする文化人類学の論文集。(早川芳枝)

◆広坂朋信／横山泰子『牡丹灯籠』白澤社

円朝の落語で知られる「怪談牡丹灯籠」と、この話に影響を与えた各種テキストを一気に紹介、その豊かな魅力に迫る。(一柳廣孝)

◆佛教大学文学部『見えない世界の覗き方』法蔵館

妖怪とは何か？ 怪異とは？ それを語る言葉をめぐって京極夏彦と小松和彦、気鋭の研究者が語り合う、「見えない世界」への誘いの書！(副田賢二)

◆湯本豪一『明治期怪異妖怪記事資料集』/同『大正期怪異妖怪記事資料集成(上)(下)』/同『昭和戦前期怪異妖怪記事資料集成(上)(中)(下)』国書刊行会

近代の新聞メディアは怪異をどのように記述したのか。膨大な関連記事を収集した驚異のデータブック。ここには宝の山が眠っている。(一柳廣孝)

◆ASIOS『UMA 事件クロニクル』彩図社

誰もが心ときめかせた UMA こといわゆる未確認生物。彼らはいま「こんなこと」になっていた。不思議大好き少年少女だった頃と対話できる一冊。(小林敦)

◆京極夏彦／小野不由美『幽』KADOKAWA

実話、小説、コミックなど多彩なジャンルの怪談を扱った総合専門誌。怪談文化の探求と発信の拠点、ここにあり！(岡田康介)

◆高岡弘幸『幽霊』吉川弘文館

自然界よりも人間界を怖ろしく思う現代人には、妖怪よりも幽霊の方が現実的で怖いはず。その精神性は近世都市に根がある！(横山泰子)

◆河合祥一郎『幽霊学入門』新書館

洋の東西にまたがり、身体・ジェンダー・建築など多岐にわたる視点から幽霊が学問として浮かび上がってくるアンソロジー。(中川千帆)

◆ロジャー・クラーク『幽霊とは何か』国書刊行会

幽霊を知るとは人を知ることだ。英国は幽霊と骨絡み。幽霊屋敷で育った著者がトリビア満載に人知苦闘と錯乱の歴史を描く。(橋本順光)

◆小松和彦『妖怪学の基礎知識』角川選書

妖怪研究の歴史や、民話、妖怪画など様々な角度から妖怪文化に触れています。妖怪研究を始める人に手に取って欲しい一冊です。(辻本慶樹)

◆菊地章太『妖怪学の祖 井上円了』角川選書

元祖「妖怪学」はダテじゃない。「妖怪博士」井上円了の類まれなる生涯を、明治の思想・宗教史に位置づけて分かりやすく解説。(井関大介)

◆横山泰子『妖怪手品の時代』青弓社

あやかしを幻出させる技術、「妖怪手品」。江戸期に隆盛を見たのち、近代に西洋と出会って乱歩のトリックに至る秘術の文化史。(今井秀和)

◆京極夏彦『妖怪の理妖怪の檻』角川文庫

私たちがイメージする「妖怪」はどのように構築されてきたのだろうか。言葉にこだわる妖怪小説家が文献を渉猟して明らかにする。(廣田龍平)

◆伊藤慎吾『妖怪・憑依・擬人化の文化史』笠間書院

動物を中心とした「異類」と人間とのかかわりを、妖怪・憑依・擬人化の側面から縦横に論じる。参考文献・年表が充実。(廣田龍平)

◆小松和彦『妖怪文化研究の最前線』せりか書房

妖怪を研究するとはいかに。各執筆者の関心から様々なアプローチで深掘りされた論考集。後に続く妖怪文化叢書の先陣を切る一冊。(市川寛也)

◆小松和彦『妖怪文化入門』角川ソフィア文庫

元祖「妖怪学」はダテじゃない。「妖怪博士」井上円了の類まれなる生涯を、明治の思想・宗教史に位置づけて分かりやすく解説。(井関大介)

◆小松和彦『妖怪文化の伝統と創造』せりか書房

怪異・妖怪文化の論文集です。江戸時代の草双紙や煤図かずおの漫画など、近世から現代まで広い範囲をカバーしています。(辻本慶樹)

※書名 50 音順・敬称略